

週刊センターニュース No.196



第196号(2008年2月25日)毎週月曜日発行
発行：金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL：http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

第176回共同学習会のご案内

日時：3月18日(火)15:30~17:00

会場：角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

講演者：鹿野 勝彦(教育担当理事)、古畑 徹(共通教育機構長)

題目：金沢大学の教育の現状と課題

趣旨：金沢大学の学士課程教育は4月の学域・学類への改組にともない大きく変わろうとしている。その基本的な制度設計はほぼ確定したが、具体的な内容についてはなお多くの課題を残している。この学習会が、それらの課題を確認するとともに、今後の方向性を探るきっかけとなることを念じている。

学士課程カリキュラムと授業科目の到達目標

1月18日、神戸大学FDシンポジウム「先進大学から学ぶ到達目標型学士課程教育改革の動向 新潟大学・山口大学の事例」に参加した。近年の大学教育改革の成果として「どのような人材を養成できるか」を目に見える形で、そして客観的な評価に耐えうる形で社会に提示することが求められている。山口大学では、シラバスの中で授業の到達目標を5つの観点(知識・理解、思考・判断、関心・意欲、態度、技能・表現)別に記述すること、成績評価方法を到達目標の観点ごとに記述することを全学で統一して平成15年より実施している。これにより、グラジュエーションポリシー(GP)と各授業科目の到達目標との関係性(カリキュラム・マップ)を明示しようとするものである。新潟大学では、平成16年から全科目に分野と水準を示すコードを付ける分野水準表示法を導入していたが、今年3月には分野水準表示法に連動した山口大学と同様の授業科目の観点別到達目標を設定し、これらの個々の授業科目の情報に基づいた専門分野ごとの主専攻プログラムの編成を完了する。(主専攻はおおよそ従来の学科に対応しているとのことであった。)

個人的には、学士課程の教育の成果は卒業研究に集約されるので、卒業研究のプロセス、成果を客観的に評価する方法を開発することが有用ではないかと思うが、評価の時代にあってはプロセスの可視化、つまりカリキュラム・マップの明示が必須となっているのであろう。各授業科目の到達目標をより客観的に検証することは外圧としての評価とは無関係に各教員の教育活動として重要である。また、カリキュラム・マップを意識すること、専門分野ごとのコア・カリキュラムの設定、カリキュラム・マップの検証は、FDの義務化を背景に今後の組織的なFD活動の核心をなすべきものと考えられる。

カリキュラム・マップの検証に関連することであるが、学士課程教育における教養教育・専門基礎

教育の重視に連動した専門分野ごとのコア・カリキュラムの検討の動きがある。1月30日付東京新聞の記事によれば、「文部科学省は、大学の学部（学士課程）の教育期間で学生が身に付けるべき知識や技術など教育内容や到達目標を示した指針を、専門分野ごとに策定する方針を固めた。指針には高度な専門性が求められ、学問の自主性も尊重する必要があるため、科学者の代表的機関である日本学会に審議を依頼する予定。大学教育について同会議への審議依頼は記録上、1949年以来、59年ぶりという。」と報道されている。このようなコア・カリキュラムの具体化の過程において、近年の学生の実態を踏まえた上で専門分野ごとのミニマムエッセンスをどう規定するかについては大学ごと、専門教員集団ごとに検討されるべきものであり、今後のFD活動の一つの柱となるであろう。本学文学部は、平成9年度から平成11年度まで九州大学文学部を拠点校とする「コア・カリキュラム（文学分野）の研究・開発プロジェクト」に参画し、広範な研究領域を抱える人文学のミニマムエッセンスが何かについて議論し、その成果は報告書にまとめられている。今後の全学でのFD活動に参考になると思われる。

中央教育審議会大学分科会制度・教育部会の下に置かれた「学士課程教育の在り方に関する小委員会」の審議経過報告書（昨年9月18日付で公表されたもの）では、「学位の授与、学修の評価」に関連して、学習成果（ラーニング・アウトカム）の具体化・明確化の必要性を指摘し、これらは各大学で独自に設定されるべきものであることを強調しつつも「学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針」を以下の通り提示している。1．知識・理解、2．汎用的技能（ここに論理的思考力、「問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる」問題解決力が含まれる。）3．態度・志向性、4．統合的な学習経験と創造的思考力（これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力）となっている。上に紹介した山口大学、新潟大学の事例はこの小委員会の提言を先取りしたものといえるであろう。

小委員会の提言にある問題発見・解決能力、論理的思考力、創造的思考力をどう育成するかは大きな課題である。ゼミナールや卒業研究などとともに正課外の研究に準じた活動の場を設計することが重要と思われる。理学部のサイエンス・ラボ、角間の里山自然学校、学長奨励研究制度など本学にはすでに優れた取組がある。個々の授業科目においても知識の伝達とともに問題発見・解決能力、論理的思考力、創造的思考力を育てる教育方法を今まで以上に意識して検討する必要があるように思える。

FD義務化を背景として、以上のようなカリキュラム、教育方法についての組織的検討に当センターも寄与していきたい。
（文責：大学教育研究開発部門 西山 宣昭）

写真展「フレスコ壁画の修復と復元」のご案内

本学資料館にて、3月28日（金）まで、写真展「フレスコ壁画の修復と復元」が開催されています。「本学教育学部宮下孝晴教授（イタリア美術史、資料館長）が統括するイタリアフィレンツェ市にあるサンタ・クローチェ教会大礼拝堂フレスコ壁画の修復プロジェクトと、教育学部美術教育研究室が行っている角間キャンパスでのフレスコ壁画復元のプロジェクトの写真展を開催。現在大学が取り組んでいる国際貢献活動である二大壁画プロジェクトがどのように展開されているのかを紹介」との趣旨です。ビデオ上映もあります。

修復は学生やOBたちによる手作業です。図書館に寄られたついでにご覧いただければ、文字通りの教育成果が目に見える形で確認できますので、お奨めします。

（文責：教育支援システム研究部門 青野 透）